

# 家庭生活のバリエーション：ブフナー・ブリュンドラー

## 「農家の修改築」

設計：ブフナー・ブリュンドラー・アーキテクテン

## 未完の住まい マッシモ・クルツィ

参照 | 本誌pp.4-13

ティチーノ州には地理的に非常に特殊な地域があり、そこには隠された珍しい宝物が集まっている。人々の存在と古くからの仕事から生まれる価値によって、さもなければ忘却されてしまう建設技術と暮らし方の記憶が保たれている。オンセルノーネ谷はそのひとつだ。かつては麦わら加工業に従事していたが、近年は渓谷一帯の多くの共同体と同じく、住民の急速な減少に直面している。自然のたぐいまれな美しさに惹かれて、夏季にはヨーロッパ全土から短期的な新住民の波が押し寄せ、人里離れた谷を人々が集まり文化交流を行う刺激的な地点に変える。バーゼルの建築設計事務所、ブフナー・ブリュンドラーのプロジェクトは、モゾーニョ・ソット村の麓にある石と木でで

きた小さな建物群の修改築だ。これは18世紀に建てられた3つの建物で、何十年も使われていなかった。建物の荒廃ぶりは、この場所にさらなる魅力を与え、新しい所有者たちと建築家たちの内面に非常に特殊で例をみなない感情を芽生えさせた。

前もって述べておく必要があるのは、これらが概して長期休暇中に使われる建物であり、したがって毎日を都市で暮らす人々とはまったく別の精神で住まわれる建築だということだ。休暇住宅に求められるのは、通常の自宅に求める快適さからの明確な分離である。さほど根本的には言えない要求から切り離されたがゆえに、この家の主は抑圧されていた感覚や暮らし方を再発見し、利便性の問題あるいは仕事や日々の生活の営みの問題から距離を置くことができた。それはより原初的な住まいを求めて、ゆったりした暮らしを再発見することだ。建築家たちがここで滅多に採用できない特別な選択をしたのは、慣習的でない暮らし方を具体化する勇気のある、開明的な所有者のおかげでもあった。

プロジェクトの対象は広いテラスに面した3つのボリュームである。テラスは乾式で石を積んで造られた強固な壁に支えられ、谷底を流れるイゾルノ川の急流を見下せる。この建築は現地にある素材を使い、急な崖の上に多大な労苦を費やして組み立てられた。おそらく安定した岩盤の上に建てられているため、建物は堅牢さと永続性が担保された。ボリュームは石と木のみで建てられ、元来はプラスター仕上げだった。外側はマッシヴな壁を安定させ保護するため、内側は壁の質を上げるために、しばしばプラスターの上に塗装または装飾が施された。大きめの薄い石板で覆われた分厚い周壁と、軟木による床スラブで建てられたボリュームは、時が経過し放置されたため荒廃が進み、一部は崩落していた。小さく控え目な開口部が日光の当たるファサードにだけ配置され、太陽から遠く冷たい風が強く吹きつける北壁は全体的に閉じているか、もしくはガラスのない開口部となっていた。その最終的な目的は、屋内の暖かさをできるかぎり保つことだった。屋内はたいてい、北側の小さなボリューム



南西側の崖下より見る



テラスより見る



アネックス棟：鉄筋コンクリートによるドームとガーゴイルを見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2020 Arnoldo Mondadori Editore

©2020 Architects Studio Japan

# 家庭生活のバリエーション：BAAQ'

「ナイラ邸」設計=BAAQ'

大洋に臨む部屋 フランチェスカ・セッラザネットィ

参照 | 本誌 pp.14-19

風景との関係、現代と対話しながら伝統を再創造すること、そして素材の研究は、あらゆる優れた建築的実践の基礎となるテーマだ。しかし、一部の場所、一部の建築家にとって、これらは根本的で不可分の性質となる。アルフォンソ・キニョネスとその設計事務所BAAQ'は確実にそれに当てはまる。メキシコシティを本拠とする彼らの実験は、メキシコの太平洋岸に位置するオアハカ州に深く根差している。プエルト・エスコンディードから北に数キロのこの地で、キニョネスはカサ・ワビのプロジェクトにローカル・アーキテクトとして携わった。カサ・ワビはアーティスト向けレジデンスと社会活動のためのプロジェクトで、アーティストのボスコ・ソディの意志で2014年に生まれ、年を追うごとに成長している。この時、キニョネスは安藤忠雄、アルヴァロ・シザ、隈研吾らのプロジェクトで協働し、国際的な現代建築と現地の建築伝統との対話を橋渡しした。こうした影響は、数世代にわたるメキシコの建築家たちから継承



リビング・エリア



左にテラス、右にプールを見る

したものに加えて、彼の仕事にはつきりと見いだせる。

カサ・ワビからオアハカ海岸沿いに50キロほど南に下ったところに、BAAQ'が実現した住宅が数軒ある。

カル邸とラック邸(2016)は鏡像関係にある2軒の住宅で、現地のコンテクストと気候に注目して、伝統的なパラバを再解釈した作品だ。パラバとは、乾燥させた棕櫚の葉で大きな屋根をかけた住居で、すでに安藤忠雄がカサ・ワビの打ち放しコンクリートの空間を覆うために使っている。ナイラ邸はキニョネスがこの地域に完成させた最新作である。このプロジェクトでは抑制された規模の中で、ミニ

マルな構成と重なり合う研究の方向性に、素材の探求、伝統と現代性の媒介、不完全なものの美学への感性と空間の生活経験への注目が加わった。

ナイラ邸は岬の上にある。そこは海岸線が突き出し、複数の角度から太平洋と向き合う場所だ。そのため、設計案では建物の2面を海に向けて開放することにより、部屋の多孔性と屋外との連続性を強調することができた。

設計案はパティオ式建築のタイポロジーを再解釈したデザインで、2本の軸が直角に交わる点に空間構成のスキームが置かれた。この2軸が視線を強調し、屋外の集



南西より見る



海辺より見る



南東より見る



平面図/断面図

## 家庭生活のバリエーション：ブルックス+スカルパ

合的な空間を描き出す。実際のところ屋外空間は中央パティオと、十字形を描く4本のウイングによって作られるヴォイドである。この十字形は四隅の4つのヴォリュームに囲まれたヴォイドと重なる。設計案を体现するのは4つの「部屋」である。これらは、打ち放しコンクリート造の矩形の基壇の上に載っている。基壇には緑地、中央のプール、住宅の共有空間に関わるあらゆる感情が生まれるエリアが、屋内の昼のゾーンと連続して置かれる。

設計案は4つのヴォリューム(1階または2階)の関係と、平面図の単純な幾何学的配置に基づくいくつかのバリエーションに分かれる。高さの異なるブロックと勾配屋根は、室内の用途に合わせた要求に応えるだけでなく、設計案に活力を与えている。特異な立地環境の中でその存在が和らげられ、海に向かって緩やかに低くなることで、4つのヴォリュームはまるで自然物のように海岸に姿を現す。

閉じたヴォリュームと開いたヴォリュームとの対置は、十字形プランから生まれた密と疎の9つのモジュールに基づいた平面デザインと、素材の選択に暗に示されている。現に、打ち放しコンクリート造の隔壁の一部と並置されているのは木と竹でできた構造体だ。いずれもオアハカ沿岸に広く分布し、伝統工法に使われる素材である。

コンクリートと現地の素材とのコントラストは、すでに近隣のカサ・ワビで安藤忠雄と協働した際に実験済みだ。この要素はナイラ邸のプロジェクトに近代性と、空間を構成する2本の透視画法的な軸線に基づく計算された幾何学を与える。住宅の基壇テラスと連続するコンクリートの壁の抑揚によって、閉じたエリアの輪郭が引かれる。これに対して、外壁の大半を構成する木と竹の壁は、空気と自然光を濾過する一方で、大部分を開閉可能することで、屋内と屋外の完全な連続性を創り出し、周囲の風景と対話させる。こうしてファサードは多様な性質を帯び、陸地に対して自らを閉じるとともに、海に向かって完全に開くのだ。

作品:ナイラ邸 | 設計:BAAQ' / J.アルフォンソ・キニョネス

設計チーム:Inca Hernández, Itzae Carrasco, Ainhoa Jimenez,

Alfonso Sodi, Liliana Tarnayo

施工: Mario Conde | 構造コンサルタント:Alfonso Sodi

規模:延床面積 250m<sup>2</sup> | スケジュール:竣工 2019年4月

所在地:Puerto Escondido, Oaxaca, Mexico

「リブトン・セイヤー邸」設計:ブルックス+スカルパ

シカゴの普通の粗野な煉瓦の新たな応用

マルコ・ビアージ

参照 | 本誌 pp.20-31

一部の読者は、2005年にグラウビュンデン地方の建築設計事務所ペアルス&デプラゼスが、チューリヒ連邦工科大学の同僚でデジタル建築講座を担当するグラマツィオとコーラーと協働して、ガントンペイン社の農業倉庫の外壁仕上げのために開発した、洗練されたメッシュ状のドレーパリーを覚えておられるだろう。ガントンペインは、貴重な品種のブドウ栽培で有名なスイスの「ビュンドナー・ヘアシャフト」地区にある、フレシュ村のワイナリーである(『CASABELLA』771号、2008)。当時は、建築プロセスのオーテーナー技術を、煉瓦によるグリッドという農村のヴァナキュラー建築の伝統的連続構造の再解釈に応用した、興味深く先駆的な実験だった。この時は、クリンカー煉瓦を用いた72枚のパネルが、農村建築の鉄筋コンクリート構造の仕上材として、特別にプログラミングされたソフトウェアで操作された産業ロボットを活用し、工場でプレ



南側ファサード

ファブリケーションされた。このロボットは、所定の三次元デザインに基づいて、煉瓦ブロックの向きを漸進的に回転させながらひとつずつ積み上げ接着することができる。その目的は、三次元的に波打ち、玉虫色に変化するテクスチャーを得ることだ。

この実験や類似の研究を、アメリカ西海岸で解釈し直したのがアンジェラ・ブルックスとロレンス・スカルパだ。彼らは、本稿に掲載したように、シカゴ北方の郊外住宅地に完成して間もない私有のコテージで、都市に面したメイン・ファサードを構成する洗練された陶製の外壁仕上げを考案した。周囲の村落に建つ伝統建築は、木造でも



北西より見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2020 Arnoldo Mondadori Editore

©2020 Architects Studio Japan

## 家庭生活のバリエーション：ラマ・エストゥディオ

「ラーソ邸」設計=ラマ・エストゥディオ

### 1軒の家、1本の梁 カミッロ・マーニ

参照 | 本誌pp.32-37

ラマ・エストゥディオは、カルラ・チャベス、フェリペ・ドノソ、カラリナ・ロダスというエクアドル出身の若手建築家がキトで結成した建築設計事務所である。3人はエクアドル・カトリック大学、バルセロナ工科大学、マドリード工科大学で建築を学んだ。彼らの研究は、現代デザイン的なフォルムと伝統的なフォルムを融合させる能力で抜きんでている。この融合の作業に認められるのは、ラテンアメリカ(およびその他)の多様なコンテクストに対するある共通したアプローチであり、そこから浮かび上るのは喚起装置としての記憶と建築のクオリティという価値である。ヴァナキュラーあるいはピクチャレスクといった修辞の裏をかくことで、彼らのプロジェクトは予想外、不完全、既存物が設

計案に与える干渉という質を明示する。これは洗練された対話なのだ。そこでは最も堅固な慣習との対決が現代的な設計案を特徴づけ、驚くような実験が促される。目的は、現代/伝統という図式的な二元論を克服する建築を建てるにある。そのために、新旧いずれのフォルムからもレパートリーを取り出し、既存の部材を活用し、伝統的な工法を再解釈し、民衆的な空間性を新しいライフスタイルに合うよう修正する。そこで立地環境との関係が形態学、地形学、居住形態の観点からも、また象徴的観点からも常に重要になるのも当然だろう。なぜなら、プロジェクトが抛って立つ場所の歴史的特徴や環境的雰囲気を呼び起こす力を持つからだ。

ラーソ邸はまさにその例である。ユーカリが生い茂る森が特徴的な農業地帯に囲まれた、コトパクシ県のサン・ホセ農場にあるこの建物は、伝統的なヴァナキュラー建築を再解釈し、現地の素材と職人の労働力をを使って建てられた。この目的に沿って採用されたのが、「タピアル」



南東より見る

という耐力壁である。練土を木枠に詰めて固めた構造壁を5つ製作し、それらを敷地の縦軸に沿って平行に立ち上げた。壁の厚みは40cmで、さらに厚さ80cmの控え壁が加わって合計120cmの分厚い壁となる。これは建築学的に重要な壁構造で、素材の特性、蓄熱性、土の匂いと大きさによって建物の性質が決まる。1本の鉄筋コ



西側ファサード



リビング・エリア



暖炉ゾーン



ベッド・ゾーン



西側の家族室

# 家庭生活のバリエーション：能作文徳 + 常山未央

「西大井のあな」設計=能作文徳+常山未央

経時とDo-It-Yourselfによるリユースの精神

マルコ・ビアージ

参照 | 本誌pp.60-71

日本の若い建築家夫婦による自宅兼事務所である本プロジェクトは、多くの問題を提起するとともに、私たちを触発してさまざまな着想——建築における技術の状況と、建築が今日および近い将来において社会に果たしうる役割についてのアイデア——を与えてくれる。建築とは常に文明の表出であり、場所やテイスト、素材や文化による条件と影響の反映であり、また当然ながら、作り手の側が世界をどのように見ているかの現れでもある。日本建築においては、その視座は往々にしてラディカルであり、自己主張を一切介在させることなく、まさに厳格な一貫性をもって形づくられる。西洋人の気質には、まったくもって馴染みのないものであろう。日本においても本稿で紹介するこのプロジェクトは、そうした抽象性ないし非実体性を審美的な理想とする時流とは真逆に、構築された有機体の物理的かつ機能的な側面を文字通り「掘り下げ

た」ものであり、作品としての形態や表現、さらには完成といった問題にさえも、どうやらほとんど関心を示していない。この建物は35歳の建築家夫婦が支出できる範囲の予算で計画されたものであり、何よりも、2011年の東日本大震災とその後の福島原発事故における個人的な体験によって研ぎ澄まされた、持続可能な環境や人間が地球に及ぼす影響といった新時代のテーマに向けた、この世代の感覚が取り入れられたものである。

能作文徳と常山未央が、必要性と願望を調和させるために用いた策は、いわゆる「適応性のあるリユース」、すなわち、既存の建物を変容させ別の目的に転用することに焦点を置くものだった。これは、日本においては、まだあまり試行例のない手法だ。日本では、伝統的に、建物の構造体に、手早く広範囲な取り替えを行うのが主流であり、古い寺社建築ですら、定期的に改修されることが珍しくない。だが、消費が抑えられて処分すべき廃棄物が削減されつつある現況をしっかり念頭に置けば、それは、いずれ近い将来、進展し広まっていくに違いない手法なのである。建物を改変し転用することとは、空間を再構成し、タイプロジーと折り合いを付けることだけを意味するわけではない。古いものに新しいものを組み入

れ、両者を重なり合わせるというデリケートな問題、すなわち、構造部材の統合や、物理的な設備システムと建設パフォーマンスの適応の問題に、真摯に取り組むことでもあるのだ。これらは、決して容易に成せることではない。「都市のワイルド・エコロジー」というこの類を見ない試みは、完成までの途上における再生と適応という論理の内に、2017年から、能作文徳と常山未央によって展開され、「住宅のあな」というスローガンに、的確にも集約された。「あな」とは、東京都品川区の一地区、西大井の寂れたエリアで破格の値段で購入した、1980年代のバブル経済期に建てられた鉄骨造4階建ての住宅の各階を隔つコンクリート・スラブに割りぬかれた開口部を指す。これらの「あな」は、各部屋の垂直方向の著しい分断を打ち破り、各階の間に連続性を創出して、下層からは暖気、上層からは外光を送り届けるために設けられた「物理的な」裂け目だ。だが、それらの「あな」は、先入観、社会的慣行、世間一般のしきたり——これらゆえに、東京で若い夫婦が初めて住宅を購入するには、必然的に、ローンを組んで、不動産業界が提供するプレッケージ型の「完成引き渡し」方式を信用しなければならない——を打ち破る、隠喩的な「裂け目」でもある。したがって、この



2階：玄関と和室



3階：階段室



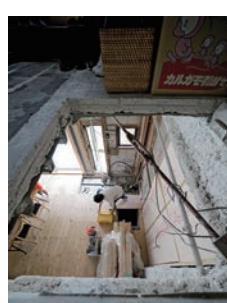
4階より見下ろす



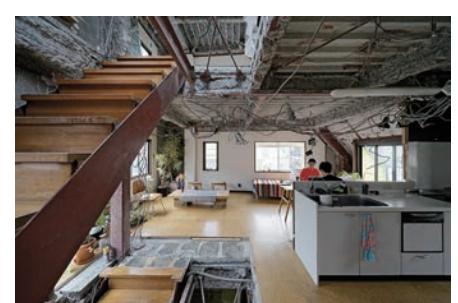
4階：寝室とクローゼット



1階：倉庫を改修したオフィス



2階より見下ろす



3階：キッチン/ダイニング/リビング

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2020 Arnoldo Mondadori Editore

©2020 Architects Studio Japan